九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アリストテレスのメガラ派批判と「可能性」の概念

岩田, 圭一
九州大学大学院人文科学研究院 : 准教授

https://doi.org/10.15017/1446181

出版情報：哲学論文集. 47, pp.1-28, 2011-10-01. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

アリストテレスのメガラ派批判と「可能性」の概念

岩田圭一

一　はじめに

アリストテレスが『形而上学』ＺＨ巻の実体論において個物の〈実体〉について探究する際、「質料―形相」の対概念、そしてこれを説明する「可能態（δύναμις）―現実態（ἐνέργεια）」の対概念が重要な役割を果たしていることは、疑いのないことである。しかし、「質料―形相」の対概念が「可能態―現実態」の対概念によって説明されることの意味については、さらに説明を求めることが可能である。そこでわれわれは、ＺＨ巻の実体論の続きをなすΘ巻に向かうことになる。Θ巻では「可能態―現実態」の対概念そのものが考察の対象とされており、われわれはこの考察を見ることによって、「質料―形相」の対概念が「可能態―現実態」の対概念によって説明されることの意味を理解することができるように思われる。しかしながらΘ巻では、最初から「可能態―現実態」の対概念が取り上げられるわけではない。アリストテレスはその対概念を理解させるにあたって、「可能態」の概念がそこから出てきたところの「能力」としての「デュナミス」をまず取り上げる。

アリストテレスはこの「デュナミス」についての考察にΘ巻の半分――Θ巻第一―五章――を費やしているが、このことは、「能力」としての「デュナミス」の考察が「可能態―現実態」の対概念の理解に対して何らかの寄与をすることを示している。アリストテレスはΘ巻第一章において「能力」としての「デュナミス」の考察を始めるにあたって、それがＺＨ巻から続いている実体論にとって最も役に立つというわけではないと断っているが（Θ1, 1045b35-1046a1）、これは、「能力」としての「デュナミス」が、「可能態」とは区別される概念であるにもかかわらず、「可能態―現実態」の対概念の理解のために何らか役に立つことを示唆していると解することができる。

ここで問題になるのは、Θ巻第一―五章における「能力」としての「デュナミス」の考察が「可能態―現実態」の対概念の理解のために具体的にどのように役立つのかということである。Θ巻第一―五章における「能力」論は一見したところ、「可能態―現実態」についての考察とは別のものであり、もっと言えば、そもそも実体論とは別の観点からの考察であるように思われる。Θ巻第一章で「デュナミス」の用法が区別され、能動的能力がそのうちの第一の用法であることが示され、Θ巻第二章において能動的能力が理性的能力と非理性的能力とに分けられ、それぞれの特性が明らかにされる。そしてΘ巻第三章において、能力の存在をその発揮としての活動（ἐνέργεια）においてしか認めないメガラ派の見解が批判され、能力の存在が確保されると同時に、そこで用いられる「可能性」の概念に一定の説明が与えられる。続くΘ巻第四章では、前章での「可能性」についての説明と関連した論述が展開される。そしてΘ巻第五章では、Θ巻第二章の内容を前提として、能力がどのようにして発揮されるのかが説明される。これらの内容が「能力」論としてまとめられることには、とくに問題はないだろう。問題はやはり、この「能力」論が「可能態―現実態」の対概念の理解にどのように寄与するのかということである。テクストを読んですぐに気づくことは、Θ巻第三章におけるメガラ派批判の結果として示される「能力」と「活動」との区別が、Θ巻第六章で示される「可能態―現実態」の対概念を先取りしているのではないかということである。確かに、「能力―活動」を「可能態―現実態」と関連づけることによって、Θ巻第一―五章における「能力」論の、「可能態―現実態」

の対概念の理解への寄与を説明することはできそうである。これは一つのありうる説明であるが、「能力―活動」と「可能態―現実態」との関連を指摘するだけでは、「能力」論の、「可能態―現実態」の対概念の理解への寄与を十分に説明したことにはならないと言うべきである。より注目するべきことは、メガラ派批判による「能力」と「活動」との区別の結果として「可能性」の概念に一定の説明が与えられる点である。「可能性」に関する考察は、Θ巻第三章においてメガラ派批判のすぐ後で行われているが、それで終わりではなく、続くΘ巻第四章でも行われている。われわれは、メガラ派批判の結果としての「能力」と「活動」との区別に加えて、さらにその区別の結果として明らかになる「可能性」についての説明にも注意することによって、Θ巻第一―五章における「能力」論の、「可能態―現実態」の対概念の理解への寄与をより明確にすることができると考えられる。

以下では、Θ巻第三章におけるメガラ派批判を見ることから始め、その上で、「能力」と「活動」との区別の結果として示される「可能性」の概念についての説明、そしてΘ巻第四章の前半で問題にされる、未来における可能性の実現の問題を取り上げることにする。これらの考察によって、Θ巻第一―五章における「能力」と「可能性」に関するアリストテレスの考察が、「可能態―現実態」の対概念の理解にどのように役に立っているかが明らかになるだろう。そしてとくに「可能的にあるもの」としての「質料」について理解を深めることができるだろう。

二　運動否定の不合理

アリストテレスは『形而上学』Θ巻第三章において、能力の存在について独特な理解をしているメガラ派の見解を取り上げ、その不合理さを示すことによって、能力の存在、とくに現に発揮されていない能力の存在を確保しようとする。[1] アリストテレスが示すメガラ派の見解（Θ3, 1046b29-32）では、能力はそれが現に発揮されているときにのみ存在するのであっ

て、発揮されていない能力というものは存在しないとされる。例えば建築する能力（建築術）は、それが現に発揮されているときにのみ存在するのであって、誰かのうちに発揮されずにそなわっているという仕方で存在することは認められない。このことが不合理であるのは明らかであるが、アリストテレスはその不合理さを明確にするためにメガラ派の見解に対して四つの反論を行っている。最初の反論は、メガラ派の見解の提示において挙げられる建築術に関するものであり、反論として理解しやすい。この最初の反論は、能動的能力の一つである理性的能力（技術）の獲得と喪失に関する事実に基づいたものである。メガラ派の見解によれば、或る建築家が建築する能力をもっているのは、実際に建築している仕事中のみで、仕事を休んでいるときはその能力をもっていないことになる。その建築家は仕事をしていないときは建築する能力を失っているが、仕事を再開すると同時にその能力を獲得することになる。しかし、能力（技術）の獲得は学習であり相応の時間を要するにもかかわらず、どうしてそのように瞬時に能力を獲得できるのかが不可解である。

メガラ派の見解に対する第二、第三の反論も、第一の反論と同様、具体的に或る種の能力が取り上げられる仕方で行われる。第二の反論では、熱いとか冷たいと感覚されうるという受動的能力に関して、第三の反論では、見ることができるとか聞くことができるという本性的な感覚能力に関して、それらの能力が発揮されているときにのみ存在するとした場合、不合理が生じる、という仕方で、メガラ派の見解が論駁される。[2] これら三つの反論は、メガラ派の見解の不合理を示すにあたって、能力に関するわれわれの経験的な理解を論拠としている。しかしわれわれの経験的な理解が実は誤っているのだと疑うことも可能であり、その意味ではそれら三つの反論はそれほど強力なものとは言えないかもしれない。これに対して第四の反論は、それまでの反論とは異なり、論理に従ってメガラ派の見解の不合理を示そうとするものである。[3] アリストテレスはその中で、「不可能性」の概念を持ち出し、これを巧みに用いて、メガラ派の見解を運動否定論として論駁する。「不可能性」の概念が鍵になっている着眼に関して問題を見出すことも可能であるが、この概念が持ち出されたことによって「可能性」の概念への視点が開かれたという意味では意義のある着眼であると言える。ともかく、第四の反論を詳しく見ることにしよ

う。

第四の反論は、それまでの反論とは異なり、具体的な例を挙げずに、問題となっている「能力」について論理的に考えていく仕方で提示される。アリストテレスはまず、メガラ派の見解を、「不可能性」の概念を用いて次のように説明する。

もし能力を奪われているもの（τὸ ἐστερημένον δυνάμεως）が不可能なもの（ἀδύνατον）であるなら、［現に］生成していないもの[4]（τὸ μὴ γιγνόμενον）は生成することの不可能なもの（ἀδύνατον … γενέσθαι）であるだろう。[5]（Θ3, 1047a10-12）

ここで述べられていることを理解するために具体的に考えてみよう。メガラ派の見解においては、或る建築家は建築活動しているときにのみ、建築する能力をもっているのであって、建築活動していないときは、建築する能力をもっていない（Θ3, 1046b30-32）。この見解において、その建築家は仕事を休んでいるとき、建築する能力を奪われているものである。ここで、右の引用の条件文のように語るなら、建築する能力を奪われているものは建築することが不可能なものである、となるだろう。われわれはこの文の意味を理解することができるが、そのときわれわれは時点に関して一定の理解をしている。建築する能力を奪われている時点をt_1とすると、建築する能力をt_1において奪われているものは、それ以降の時点においてまったく建築することがないという意味で、建築することが不可能なものであるかというと、そうではないように思われる。というのも、建築する能力をt_1において奪われていても、後のt_2において、建築する能力を獲得していてその能力を発揮するということが考えられるからである。「建築する能力を奪われているものは建築することが不可能なものである」という文をわれわれが理解できる一つの仕方は、建築する能力をt_1において奪われているものはt_1において建築することがt_1において不可能なものである、というものである。当該の能力をもっていないものが、それをもっていないその時点においてそ

の能力を発揮することが不可能であることは、自明の理である。

それから、右の条件文に対する帰結文を理解するには、メガラ派の見解の前提を思い起こせばよい。その前提とは、或るものが或る能力を現実に発揮して活動していないとき、そのものにはその能力はそなわっていない、というものである。右の引用の表現に合わせるなら、現に生成しているのでないとき、生成のための能力はそこには存在していない、という前提になるだろう。要するに、右の引用の推論は、「pする能力をt_1において奪われているものは、t_1においてpすることがt_1において不可能である」と、「t_1において現にpしているのでないものは、pする能力をt_1において奪われているものである」ということから、「t_1において現にpしているのでないものは、t_1においてpすることがt_1において不可能である」ということを導き出しているように思われる。

このように、メガラ派の見解はt_1という一時点に限定して理解されるべきであるように見える。右の引用の推論に関するいまの説明は、時点を明示する形で行った。すなわち、現にpしているのでない時点において、pする能力が存在しておらず、その時点においてpすることがその時点において不可能である、と説明した。右の推論をこのように理解するとき、pするという運動が存在しないのは一時点であって、後の時点において運動が存在する可能性は否定されない。t_1において現にpしておらず、その時点においてpすることがその時点において不可能だとして、後の時点t_2では、pする能力をどうにかして獲得していて現にpしている、ということも考えられる。そのようなt_2を考えることが許されるのなら、t_2において運動が存在することになるのだから、右の引用の推論は、メガラ派の見解を運動否定論として論駁するものではないことになってしまう。[6] そこで第一の反論を思い起こして、メガラ派は能力の獲得を説明できないのだから、t_2において能力を獲得していることは考えられない、と言うことができるかもしれない。つまり、第一の反論を前提することで、右の引用の推論は、運動否定論として理解されると考えるのである。

しかし、右の引用の推論を運動否定論とみなすために第一の反論を前提するという解釈は、続くアリストテレスの論述か

ら判断すると、不適切なものであることがわかる。それだけでなく、ここで行った、右の引用の推論に関する説明も、実は不適切であったことが明らかになる。アリストテレスは右の引用の後、能力の獲得の問題にはまったく言及せず、代わりに、ここで用いている「不可能性」の概念について説明を行っているが、その説明は、能力を奪われているものが不可能なものであるということを自明の理として理解することを許さないものとなっている。われわれが自明の理として理解していたのは、t_1において能力を奪われているものがt_1においてその能力を発揮することがt_1において不可能であるということである。しかしアリストテレスによる「不可能性」の説明を見ると、ここで「不可能なものである」と言われているものは、その能力を発揮することが常に不可能であるようなのである。[7] 右の引用に続く、「不可能性」に関する説明は、以下のとおりである。

> しかし、生成することの不可能なものが「ある（εἶναι）」［現に生成、運動している］[8] とか「あるだろう（ἔσεσθαι）」［生成、運動するだろう］と語る人は、誤ったことを語っていることになる（というのも不可能なものはそれ［「ある」］とか「あるだろう」ということがないもの］を意味していたのだから）。その結果、これらの説は運動も生成もないものにする（Θ3, 1047a12-14）

この引用によれば、pすることが不可能なものは、現にpしていることも、未来においてpするだろうこともないものである。具体的に考えてみよう。建築する能力を奪われているものは建築することが不可能なものであるという場合、右の引用によれば、建築する能力を奪われているものは、現に建築しているのでもないし、未来において建築するだろうこともないものである。現に建築しているのではないというのは問題ないが、未来において建築するだろうことがないというのは問題である。というのも、建築する能力をt_1において奪われているとした場合、先に見たように、後のt_2において、建築す

る能力を獲得していて現に建築している、ということが考えられるからである。建築する能力をt_1において奪われているものを、未来において建築するだろうことがないものとみなすことは、明らかに問題である。

この問題に対してわれわれはどのように考えるべきだろうか。テクストには反するが、常識的に考えて、建築する能力をt_1において奪われているものを、未来において建築するだろうことがないものとみなすことをやめるべきだろうか。しかしこれでは、未来において建築するだろうことが認められるのだから、運動の否定という結果が生じないことになってしまう。そこで、次のような考えを提案したい。それは、建築する能力を奪われているものが存在する時点t_1を問題にしないという考えである。つまり、ここで、建築する能力を奪われているものと言われているものについて、t_1においてはそのようなものであるが、t_2においては建築する能力をもっていて現に建築している、という見方をしないのである。言い換えれば、建築する能力を奪われているものは時間的な制約なしに端的にそのようなものとして存在していると考えるのである。これは奇妙な考えだと思われるだろうが、エレア派の影響下にあるメガラ派の見解としては、ありうる考えである。メガラ派の見解によれば、現に建築活動しているときにのみ、建築する能力が存在し、現に建築活動していないときには、建築する能力は存在しない。この見解を聞いたわれわれは、メガラ派が、建築活動している時点と建築活動していない時点という異なる二つの時点を認めていることに気づき、われわれはメガラ派の見解を説明するにあたって時点を考慮するべきだと考えた。[9] しかしこの考慮は問題であるように思われる。というのもメガラ派は、建築している時点と建築していない時点、言い換えれば、建築する能力をもっている時点とその能力をもっていない時点との関係について無関心であると考えられるからである。そのようなメガラ派にとって、建築する能力をt_1において奪われているものが、後のt_2において、その能力を獲得していて建築している、ということは、考えもつかなかっただろう。建築する能力を奪われていて現に建築していないものが、後になって、建築する能力を獲得していて現に建築している、と考えることは、「あらぬ」から「ある」への移行、変化を認めることである。エレア派の、「あるものはある、あらぬものはあらぬ」という思想の影響下にあるメガラ派であれば、

そのような移行、変化は認めないだろう。そうであるとすれば、メガラ派は、一方で活動があるときには当該の能力が存在し、他方で活動がないときには当該の能力は存在しない、と語るのみであり、両者の間の移行、変化は念頭になく、せいぜい、一方が成り立っているとき他方は成り立っていないという認識があるくらいだと言うことができるだろう。

メガラ派の立場をこのように捉えるとき、先の引用に関して言えば、この文脈でメガラ派は、活動がなく当該の能力が存在しない場合だけを考えればよい。活動があり当該の能力が存在する場合への移行、変化は存在しないので、そのような場合を考慮に入れて、「不可能性」の概念がここで用いられることに疑問を抱く必要もなくなる。先の引用で言われていたことは文字通りに理解してよいことになる。すなわち、能力を奪われているものは不可能なものなのであり、現に生成していないものは生成することの不可能なものなのである。ここで、時点を考慮するべきではないのである。時点を考慮に入れると、これまでに論じてきたように、「不可能性」の概念が導入されていることに問題が生じる。しかし時点を考慮せずに、いま述べたようにメガラ派の立場をよく理解するなら、先の引用における「不可能性」の概念の導入には問題がないことがわかるだろう。

ここに示した解釈はメガラ派の見解をそもそもの最初から、運動、変化を認めないものと理解しているので、この解釈に対する反論として、結果として運動の否定が出てくることにならないのではないか、という意見が出されるかもしれない。しかしこれに対しては、第四の反論でアリストテレスは厳密に論証を行っているわけではなく、むしろ、わかりにくいメガラ派の見解を引用のように説明することによって、メガラ派のもともとの立場である運動否定の立場をより明確にしているのだと答えたい。ともかく、メガラ派の見解に対する第四の反論は、それまでの反論のようにわれわれの経験的な理解を拠り所にしたものとは異なり、論理に従ってメガラ派の運動否定の立場を明確にし――メガラ派の論理に従ったがゆえに「不可能性」の概念を持ち出すことができた――、メガラ派の見解の不合理を明らかにしている。これは、メガラ派批判として重要であることは言うまでもないが、アリストテレスの「可能態―現実態」の対概念への展開を準備する「可能性」概念の

明確化をもたらしてくれる点においても重要である。次に、メガラ派批判のすぐ後に示される「可能性」の概念の説明を見ることにしたい。

三　能力から可能性へ

アリストテレスはメガラ派の見解が不合理であることを示した後、「能力（δύναμις）と活動（ἐνέργεια）とが異なっていることは明らかである」（Θ3, 1047a18-19）と述べる。もう少し詳しく言うと、アリストテレスは、活動があるときにのみ能力が存在するという仕方で能力と活動を同一化したメガラ派の見解[10]に対して、活動がないときも能力が存在するという意味で能力と活動とは異なっていることを明らかにする。活動がないときに存在する能力とは、発揮されていない能力のことである。能力をもっているがこれを発揮しないでいるものは、当該の活動をすることが可能であるが、現実にはその活動をしていないものである。ここでわれわれは、「可能である」ということに注目しなければならない。アリストテレスは、発揮されていない能力について考える際、それが発揮されていないものであることを示す特性として、その能力をもつものが「可能である」状態にあることを見出すのである。「能力」から「可能性」への、アリストテレスの関心の移行は、能力と活動とが異なることが示されたすぐ後の部分から読み取ることができる。その部分は以下のとおりである。

したがって［能力と活動とが異なっているとした場合］、或るものが、あることが可能であるが、あらぬ（δυνατόν μέν τι εἶναι μὴ εἶναι δέ）、ということがありうる（ἐνδέχεται）し、また［或るものが、］あらぬことが可能であるが、ある（δυνατὸν μὴ εἶναι εἶναι δέ）、ということがありうることになる。[11] そして他の諸々のカテゴリーの場合も同様であり、［例えば］歩くことが可能であるが歩いていないということ［がありうるし］、また歩かないことが可能であるが歩

いているということ［がありうる］。（Θ3, 1047a20-24）

歩くことが例に挙げられているので、この例で考えてみよう。アリストテレスの立場としては、歩く能力と歩く活動とは異なっている。これらが異なっていることが示されるのは、その活動が存在するときではない。或る人が現実に歩いているとき、彼は歩く能力をもっていて、その能力を発揮して歩く活動をしている。この場合、歩く能力と歩く活動は同時に存在しており、メガラ派はそれらが同時にしか存在しないと考えたために結果的にそれらを同一化してしまった。これに対して、先ほどまで歩いていた彼が立ち止まったとき、彼自身の身体能力がとくに変化しない限りにおいて、彼は歩く能力をもっているが、歩く活動をしていない。このとき、歩く能力と歩く活動が異なっていることが明確になる。そしてアリストテレスは、彼が現に歩いてはいないが歩く能力をもっていることをより明確にするために、「可能性」の概念を用いて、彼は「歩くことが可能であるが歩いていない」と説明する。この「可能である」は、「能力をもっている」と同じことであるように見えるかもしれない。実際、現実に歩いていないが歩くことが可能であることと、歩く活動をしない状態で歩く能力をもっていることとは、同じことである。しかし、右の引用に示されるもう一つの例を見ると、「可能である」と「能力をもっている」とは区別されるべきであることがわかる。その例は、「歩かないことが可能であるが歩いている」というものである。「可能である」と「能力をもっている」とが同じことであるとしたら、この例においては、歩かない能力が存在していて、この能力が発揮されていないことになるだろう。しかしアリストテレスの「能力」理解から判断して、歩かない能力というものを認めることは不自然である。その例でアリストテレスが言いたいのは、歩かない能力が存在することではなく、歩かないことが可能であるということである。[12] このように、ここでの「デュナトン」を歩かない可能性をもつものととるなら、それと合わせて、歩くことが可能であるという場合の「デュナトン」も、歩く可能性をもつものととるべきである。こうして、右の引用においてアリストテレスの関心が、「能力」から「可能性」に移行していることが明らかになる。[13]

続いてアリストテレスは、可能性をもっているものという意味での「デュナトン」――「可能なもの」と訳すことにする――に、一つの規定を与える。その規定には「不可能性」の概念が含まれているので、また「不可能性」は「可能性」の概念を前提しているので、アリストテレスがそこで行っている「可能なもの」の規定は定義とは言えない。[14] しかし「可能なもの」についての理解を明確にするという意味では、一つの有意義な規定であると考えられる。以下がその規定である。

> 可能なもの（δυνατόν）とは、そのもの［可能なもの］がそれの可能性（δύναμις）[15] をもっていると言われるところの活動（ἐνέργεια）がそのものに属するとした場合に、不可能なことが何もないであろう（οὐδὲν ἔσται ἀδύνατον）ものである。[16]（Θ3, 1047a24-26）

この引用の後でいくつかの例が挙げられるが、[17] 先ほど取り上げた、歩くという活動の場合で考えてみよう。或るものXが歩くことが可能なものであるとすれば、Xには右の引用の規定があてはまるはずである。その規定をあてはめると、歩くことが可能なものXは、Xがそれの可能性をもっていると言われるところの活動すなわち歩くという活動がXに属するとした場合に、不可能なことが何もないであろうものである。この規定に合わないもの、すなわち、歩く活動が属するとした場合に不可能なことが生じるであろうものは、歩くことが可能なものではない。つまりそれは、歩くことが不可能なものである。例えば、本性上足をもっていない魚にその規定をあてはめてみよう。歩くという活動がその魚に属するとした場合、どのような不可能なことが生じるだろうか。本性上歩かないものが歩くという不可能なことが生じるという説明では不十分だろう。歩くには足が必要であるが、その魚が歩くと仮定した場合、足をもっていないものが足をもっているという不可能なことが生じる、と説明したほうが、その不可能性がよりはっきりするだろう。[18] このような不可能なことが生じないものであれば、それは歩くことが可能なものと認められるのである。

アリストテレスがここで行っている「可能なもの」の規定は、何かが可能なものであるかどうかを明確にするのに有益なものであり、その限りではとくに問題がないように思われる。ただし、その規定の中で用いられている「活動」という語については、注意が必要である。先ほども問題にしたことであるが、アリストテレスが挙げる例にあるように、歩くことが可能なものもあれば、歩かないことが可能なものもある。歩かないことが可能なものを右の規定のように説明すると、歩かないという活動が属するとした場合に不可能なことが生じないもの、となるだろう。歩かないことを活動とみなすことは問題であるように思われる。歩かないことは、歩くという活動の否定である。おそらくアリストテレスは右の引用において、簡略化のために「活動」のみを挙げ、「活動の否定」は省略しているのだと考えられる。歩かないことが可能なものについては、厳密に言えば、「そのものがそれの可能性をもっていると言われるところの活動の否定がそのものに属するとした場合に、不可能なことが何もないであろうもの」となるだろう[19]。

アリストテレスによる「可能なもの」の規定は、すでに触れたように、「不可能性」の概念を前提にしている。不可能であるとはいかなることであるかを知っている者が、可能なものを可能なものとして把握することができる。「可能性」と「不可能性」については『命題論』第十二―十三章の論述によって基本的な理解を得ることができるが[20]、Θ巻では続くΘ巻第四章において、未来における可能性の実現の問題との関連で「不可能性」の概念についての理解が呼び覚まされる。その前にアリストテレスはΘ巻第三章の末尾（Θ3, 1047a30-b2）で、「能力」から「可能性」への移行との関連で、「エネルゲイア」および「エンテレケイア」という語に関して「運動」とは異なる「現実性」の用法があることを示唆している。ただし、ここではその用法が明確に説明されているわけではない[21]。本稿では「可能性」の概念を主題としているので、これについてはここでは取り上げず、続くΘ巻第四章の前半で考察される未来における可能性の実現の問題に向かい、「可能なもの」と「不可能なもの」について理解を深めることにしたい。

四　可能なものと不可能なもの

アリストテレスはΘ巻第四章のはじめで、Θ巻第三章で示した「可能なもの」の規定を前提にした上で（Θ4, 1047b3）、「これは［生成、運動することが］可能なものであるが、ある［生成、運動する］ことはないだろう、と言うことが真でありえないことは明らかである」（1047b3-5）と述べる。そして仮にそのように言うことが真であるとしたら、「ある［生成、運動する］ことが不可能なものがなくなる」（1047b5-6）と述べ、これについて具体的に説明していく。不可能なものがなくなるという不合理についての具体的な説明を見る前に、1047b3-5で述べられていることがいわゆる「充満の原理（the principle of plenitude）」を示しているかどうかを判断することにしたい。[22]

充満の原理とは、可能性はいつか実際に実現するという原理である。[23] この原理によれば、決して実現しない可能性、常にその状態にとどまっている可能性というものは存在しない。アリストテレスがΘ巻第四章のはじめで述べていることは、「Xはpすることが可能なものであるが、pすることはないだろう」と言うことが偽であるということである。これは、「Xはpすることが可能なものであるなら、pするだろう」と言うことが真であることを意味する。例えば「Xは建築することが可能なものであるなら、建築するだろう」と言うことは真である。この言明が充満の原理を示していると解すると、そのXは、いつか実際に建築するだろうものであることになる。しかしここで疑問が生じる。建築することが可能なものであるXは本当にいつか実際に建築するのか、と。Xが或る時点に、建築することが可能なものであるとしよう。しかし何らかの出来事によって、Xはその時点以降、二度と建築しないということもありうる。この場合、建築することが可能なものX――これはいつか実際に建築するだろうものと理解されている――はその時点以降建築しないのだから、いつか実際に建築するだろうという原理に反することになってしまう。これは、アリストテレスが充満の原理を認めていないことを示すために、

よく言われることである。その際、『命題論』第九章の一節（*De Int.* 9, 19a12-14）における例、すなわち、或る衣が、切り裂かれることが可能なものであるとした場合に、切り裂かれる前に擦り切れてしまい、切り裂かれないで終わることがある、という例がよく引き合いに出される。可能性は実現するかもしれないし、実現しないかもしれないのであって（cf. *De Int.* 9, 19a9-11, 12, 21b12-17）、いつか実際に実現するだろうと断言することはできないように思われるのである。

そこで、「Xはpすることが可能なものであるなら、pするだろう」という言明は充満の原理を示していないという解釈をとることになるが、この場合、そこで言われる「pするだろう」には、いつか実際にpするだろうという強い意味は含まれていない。この解釈では、pすることが可能なものXが「pするだろう」と言われる際、Xが、pする可能性を実現する前になくなるなどして、pしないで終わるということも認められる。ここで「pするだろう」と言われていることの意味を理解するには、Θ巻第三章における「可能なもの」の規定を思い起こせばよい。その規定とは、pすることが可能なものは、その可能性が実現すると仮定した場合に不可能なことが生じないであろうものである、というものであった。「pするだろう」というのは、まさにこのこと、すなわち、可能性の実現の仮定が不可能なことを伴わないことを意味していると考えられる。もっと簡単に言えば、「pするだろう」というのは、pすると仮定して差し支えないということである。このように、「pするだろう」というのは、いつか実際にpするだろうという強い意味にではなく解することができる。要するに、アリストテレスはΘ巻第四章のはじめで、Θ巻第三章において示した「可能なもの」の規定を再度、言い方を変えて提示しているのであって、充満の原理を提示しているのではない、と解釈できるのである。[24]

Θ巻第四章前半のテクストがΘ巻第三章における「可能なもの」の規定の確認で始まっていることを見たところで、実際にこのテクストによってアリストテレスが何を言おうとしているのかを見ていくことにしよう。すでに触れたように、アリストテレスはここで、不可能なものがなくなるという不合理について具体的な説明を行っている。この不合理は、「Xはpすることが可能なものであるが、pすることはないだろう」という間違った言明を誤って正しいものとみなす場合に生じる。

アリストテレスは、そのような誤った理解をしている人がどのようにして不可能なものを消去しているかを、正方形の対角線がその辺によって通約されえないことを例に挙げて、次のように説明している。

> ［あることが不可能なものがなくなると］私が言っているのは、例えば次のような場合である。すなわち、「［この正方形の］対角線が［その辺によって］測られる［通約される］ことは可能であるが、測られる［通約される］ことはないだろう」と、或る人――あることが不可能なもの［通約されることが不可能なもの］を考えない人――が言う場合である。その理由［その人がそのように言う理由］は、「或るものが、あるないし生成することが可能なものであるが、あることもあるだろうこともない」ことを妨げるものは何もない、というものである。（Θ4, 1047b6-9）

「あることが不可能なものを考えない人」にとって、その正方形の対角線が通約されることは、不可能なことではなく、可能なことである。そして彼は、その対角線が通約されることは可能であるが、通約されることはないだろう、と言うことによって、実際にその対角線が通約されないという事実を表現している。つまり彼は、決して実現することのない可能性を認めることによって、その対角線の通約不可能性を消去しているのである。確かに、先に見たように、可能性というのは実現されないで終わることもある。しかしそれは、実現されるかもしれないし実現されないかもしれない可能性に関して、結果的に実現されなかったということを意味しているにすぎない。これに対して、右の引用における不可能なものを考えない人は、決して実現されることのない可能性を立て、これによって、不可能なものを消去している。アリストテレスは、われわれが不可能なものとして認めるだろうもの、すなわち、その辺によって通約されることが不可能である正方形の対角線を例に挙げ、可能なものについて「あることはないだろう」と語る人が、不可能であるはずのものを可能なものの部類に入れてしまっていることを明らかにするのである。可能なものと不可能なものが存在するとわれわれが考えるところを、その人

は、それら両者をひっくるめて可能なものとみなすのである。われわれが不可能なものとみなすものを、彼は、決して実現することのない可能性を認めることによって、可能なものとみなしている。これは、「可能性」の概念の適用を広くしすぎた立場である。アリストテレスは右の引用において、その立場のための理由として、「或るものがpすることが可能なものであるが、pすることもpするだろうこともない」ことを妨げるものは何もないということを述べている。この理由はもちろん、アリストテレスの考えではなく、問題の発言をしている人のものであると考えられる。アリストテレスの考えでは、pすることが可能なものについて、現にpしていないことは認められても、pするだろうことがないということは認められない。アリストテレスがこの理由を挙げたことには、その人が不可能なものを消去していることを明示する意図があったのではないかと考えられる。この理由に見られる、「pすることもpするだろうこともない」というのは、不可能なものの意味としてΘ巻第三章において言及されていたことである。[25] そうすると、その人が理解する「可能なもの」には、アリストテレスが理解する「不可能なもの」の意味が含まれており、その結果、その人は不可能なものを消去しているということが明確になる。その人が、正方形の対角線はその辺によって通約されることが可能であるが、通約されることはないだろう、と言うことができる理由は、不可能であると言うべきものを可能なものとみなしてしまっているからなのである。

アリストテレスは右の引用の後、Θ巻第三章における「可能なもの」の規定を引き合いに出し、「あるのではないが［あることが］可能であるものが、あるないし生成していると仮定した場合、不可能なことは何もないだろうことが必然である」（Θ4, 1047b9-11）と述べる。何かがpすることが可能なものであるとき、その可能性が実現すると仮定した場合、不可能なことは何もないのでなければならない。不可能なものを考えない人が言うように、その正方形の対角線が通約されることが可能であるとすれば、それが通約されると仮定した場合に、不可能なことは何も生じないはずである。しかし実際には、正方形の対角線が通約されるという不可能なことが生じてしまう（1047b11-12）。アリストテレスはあくまでも、正方形の対角線は通約されることが不可能である、あるいは、通約されることが不可能である正方形の対角線が存在する、と考える。

ここでアリストテレスが不可能なものの存在に言及することは、その存在を前提として認めるアリストテレスの立場の表明にほかならず、われわれはその立場のための理由を求めるべきではないように思われる。実際、アリストテレスはその理由を明確に説明していない。しかし、偽と不可能性とが異なることに言及することによって（1047b12-13）、不可能なものの存在が認められるべきであることをわれわれに示そうとしている。目の前にいる人がいま座っているとした場合、その人が立っていることは偽であって、不可能ではない（1047b13-14）。なぜなら彼は立っていることも可能だからである。アリストテレスの見解においては、あることが不可能なものを、決して実現することのない可能性をもつものとみなして消去することは、決して許されないのである。

このようにアリストテレスはΘ巻第四章の前半において、不可能なものが確かに存在することを明らかにしている。アリストテレスがこのようなことを行ったのは、Θ巻第三章における「可能なもの」の規定をより明瞭に理解させようという意図があったからではないだろうか。Θ巻第四章前半のテクストの冒頭、そしてその中途において、Θ巻第三章における「可能なもの」の規定への参照があることは、その規定とΘ巻第四章前半のテクストとの関連性を明確に示している。アリストテレスはΘ巻第三章における「可能なもの」の規定に際して「不可能性」の概念を前提していたが、不可能なものが確かに存在することを具体的に示す必要があると感じ、Θ巻第四章の前半でそれを行ったのだと考えられる。これによって、「可能なもの」の規定についてのわれわれの理解は、より明瞭なものになったと言うことができるだろう。

五　おわりに

以上によって、Θ巻第三章におけるメガラ派批判と、それに続くΘ巻第三章から第四章前半までのテクストにおける「可能性」の概念について理解を深めることができたのではないかと思う。最後に、とくに「可能性」の概念についての理解が

Θ巻における「可能態―現実態」論にとってどのような意味をもっているかを考えることにしたい。「可能態―現実態」の対概念がどのようなものであるかが説明されるのは、本稿のはじめで触れたように、Θ巻第一―五章の「能力」論のすぐ後のΘ巻第六章においてである。アリストテレスはデュナミスをもっているものを表すために、「能力」論の文脈では「デュナトン（可能なもの）」という語を用いていたが、Θ巻第六章では、「エネルゲイア」との対比を明示する中で、「可能的に／可能態において（δυνάμει）」あるものという言い回しを用いている（Θ6, 1048a32）。ここから、「可能なもの」と「可能的にあるもの」とを、用いられる文脈が異なるものとして区別するべきであるようにも思われる。確かにZH巻の実体論では、質料を表すのに「可能的にあるもの」という言い回しが用いられていた。しかし、「能力」論と「可能態―現実態」論の橋渡しとも言えるΘ巻第六章において、アリストテレスは「可能なもの」と「可能的にあるもの」とを区別して用いていない。それは、「エネルゲイア」に対して「可能的にあるもの」という言い回しが示されたすぐ後で、「可能態―現実態」の対概念にどのような説明を与えるべきであるかが示される際に明らかになる。そこでアリストテレスは、その対概念を説明するにあたって、概念的な規定を与えるのではなく、例示によって類比的に理解することで満足するべきであると述べ[26]（Θ6, 1048a36-b9）、その例示における「エネルゲイア」に対するものを「デュナトン」と呼んでいる。この「デュナトン」の例として挙げられているのは、本稿で問題にした「可能なもの」――建築しうるもの（建築することが可能なもの）、眠っているもの（目覚めることが可能なもの）、視力をもっているが目を閉じているもの（見ることが可能なもの）――と、質料である。本稿で問題にした「可能なもの」とは、Θ巻第一章で言われていたことからも明らかなように、運動との関係において言われるデュナミスをもっているものである。もう一方の質料は、実体論の中に位置づけられる「可能態―現実態」論において問題になるものである。「デュナトン」の例として挙げられるものがこのように、「能力」論で問題になるものと「可能態―現実態」論で問題になるものに分けられることは、よくわかる。しかしここで注目したいのは、両者が「デュナトン」としてひとくくりにされていることの意味である。両者は問題領域上は区別されるが、やはり共通の性格をもってい

るから「デュナトン」、すなわち、可能なものないし可能的にあるものとしてまとめられているはずである。質料が、本稿で見た「可能なもの」と共通な性格をもっているのであれば、その「可能なもの」の理解は「質料」の理解に役立てられるべきだろう。

本稿で明らかにした「可能なもの」は、当該の活動の可能性が実現すると仮定した場合に不可能なことが生じないであろうものであったが、これはその可能性が実現していない、未発現のものにほかならない。アリストテレスの理解では、当該の活動の可能性が実現している現実的なものも、当該の活動が可能なものとみなされるが（*De Int.* 13, 23a8-10）、本稿で取り上げた「可能なもの」の考察は、とくに未発現のものとしての「可能なもの」を規定することを目的としていた。このような未発現の「可能なもの」という理解を「質料」の理解に役立てるとすれば、それは、生成論の文脈における質料――生成の存続基体[27]――を特徴づけるものとして役立つだろう。生成の存続基体はその生成の起点においては、まだ特定の形相を受け入れていないものである。例えば青銅球の生成において、生成の存続基体としての青銅はまだ〈球〉という形相を受け入れていない。そのような質料を「デュナトン」として捉えるとき、本稿での考察を踏まえて、その青銅が〈球〉を獲得すると仮定した場合に不可能なことが生じないことを理解するなら、われわれは青銅という質料について十分な理解をしていると言うことができるだろう。ただし、ここには問題もある。生成の存続基体としての質料は、当該の生成を前提として理解されているものであり、いまの例で言えば、青銅は青銅球になるという生成の基体として理解されているのであって、他のもの、例えばヘルメス像になるという生成の基体として理解されているのではない。つまり、その青銅はいくつかのものになることが可能なものではなく、球になることが可能なものなのである。この点が、これまでに見てきた「可能なもの」――あることもあらぬことも可能なもの――とは異なっているように思われる。しかしながら、質料のこのような特徴は、よく考えてみると、非理性的な能力としての能動的能力の場合と類比的である。例えば熱くすることが可能である火は、熱くするという能動的能力をもっているが、これは熱くするのみで、熱くしないことは可能でない。一方向の可能性をもつ非

理性的な能動的能力のように、質料も、特定の形相を受け入れるしかない、一方向の可能性をもつものである――質料の場合はその能力は特定の形相を受け入れる受動的能力であるが――と考えられる。このように、生成の存続基体としての質料については、本稿で明らかにした「可能なもの」の理解がかなり役に立つと言うことができるだろう。

しかし「質料」には、いわゆる結合体（実体）の構成要素としての質料、すなわち、現に特定の形相と結合している質料という意味もある。本稿のはじめで言及した、「可能態」の概念によって説明される「質料」は、この意味のものであった。これは、特定の形相を受け入れると仮定した場合に不可能なことが生じないというように特徴づけられるべきではないだろう。それはすでに特定の形相を受け入れている。にもかかわらず、アリストテレスはそのような質料を「可能的にあるもの」と説明する。このことを理解するには、結合体という個体把握が生成論を前提にして成り立っていることを理解する必要がある。生成の存続基体としての質料、例えば青銅球になるという生成の存続基体としての青銅は、特定の形相を受け入れるという一方向の可能性をもつものとして理解されたが、この理解のおかげで、生成の存続基体としての青銅はそのまま結合体の構成要素としての質料になると言うことができる。それゆえ、結合体の構成要素としての質料も「可能的にあるもの」と呼ぶことができるとアリストテレスは考えたのではないだろうか。このようにして、曖昧な概念である「質料」が「可能的にあるもの」とみなされることの意味が理解され、結合体の構成要素としての質料についても、本稿で明らかにした「可能なもの」の理解が役に立つことがわかるだろう。こうして、本稿で見た「可能性」の概念についての理解がΘ巻における「可能態―現実態」論に対してもつ意味について一定の説明を与えることができた。ここではとくに「可能性」の概念に焦点をあて、「可能態―現実態」論に対するその意義について考察したが、「可能態―現実態」論の全体を把握するには、「可能性」ないし「可能態」の対概念である「現実性」ないし「現実態」について理解を深める必要がある。これについては今後の課題とすることにしたい。

註

（1）筆者は拙稿「アリストテレス『形而上学』Θ巻第一―三章における能動的能力の説明」（九州大学大学院人文科学研究院『哲学年報』第七〇輯、二〇一一年、七五―九七頁）において、Θ巻第一章から第三章の途中までを取り上げ、「能力」としての「デュナミス」の第一の用法である能動的能力について考察した。アリストテレスによるメガラ派の見解の説明、そしてそれに対する四つの反論のうちの第三の反論までは、その拙稿で取り上げた。本稿はその続きとなるもので、第四の反論、そしてそれに続く「可能性」の概念の説明、さらにΘ巻第四章前半における、未来における可能性の実現の問題を順に取り上げて考察する。しかし第四の反論について考察するのに先立って、先の拙稿で取り上げたメガラ派の見解の説明および第一から第三の反論についてごく簡単に見ておくことにする。なお、本稿は着想としては、九州大学哲学会平成二十二年度大会（二〇一〇年九月二十五日、九州大学）での発表原稿「能力と活動――アリストテレス『形而上学』Θ巻におけるメガラ派批判の意義――」の作成時に筆者のうちにあったが、その発表原稿では、能動的能力に関する先の拙稿のもとになる考察を主に行い、第四の反論は手短に取り上げたのみであり、また「可能性」の概念の説明については取り上げなかった。本稿では、まず第四の反論を再検討してその意味をより明確にし、その上で「可能性」の概念の説明について考察することによって、Θ巻におけるメガラ派批判の意義を明らかにすることにしたい。

（2）熱いものや冷たいものは、現にそうしたものとして感覚されていなくても、そのようなものとして存在しているとアリストテレスは考える。これは、おおよそ誰もが熱いないし冷たいと感じるであろうものの存在を認める常識的な立場であると言える。メガラ派の見解は、アリストテレスも指摘するとおり、プロタゴラスの相対主義的な見解に通じるものである（Θ3, 1047a6-7）。プロタゴラスによれば――プラトン『テアイテトス』151e8-152e10を参照――、或る人が或るものXを冷たいと感覚しているなら、そのときその人にとっては冷たいものが真に存在し、また他の人が同じXを冷たくないと感覚しているなら、そのときその人にとっては冷たくないものが真に存在する。この見解において、Xはそれ自体として冷たいもの（冷たいと感覚されうるもの）とか冷たくないもの（冷たくないと感覚されうるもの）として存在するのではない。この見解から、現にしかじかと感覚されて

いないとき、しかじかと感覚されうるものは存在しない、というメガラ派の見解が生じたと見ることは可能だろう。それからまた、見る者や聞く者についても、やはり常識的な立場からすれば、見る者は見ていないときも見る能力をもっており、それゆえ、或るとき目を閉じていた人が目を開けることによって見るのである。第二、第三の反論については拙稿、二〇一一年、八九―九二頁を参照。

（3）Makin も言うように、第一から第三の反論における考えをメガラ派は拒否することができるが、メガラ派の論理に沿ってその見解を論駁する第四の反論はメガラ派にとって脅威的なものである。Cf. S. Makin, *Aristotle Metaphysics Book Θ, Translated with an Introduction and Commentary*, Clarendon Press, Oxford, 2006, pp.68-69.

（4）ここで「生成」という語が用いられているが、これは広義の「運動」と同義であると考えられる。それは、すぐ後で運動否定の不合理が語られる際に「運動」と「生成」が並べられていることからも明らかである。「運動」と「生成」をこのように並べて用いることはプラトンの『テアイテトス』にも見られる。

（5）この文で用いられる‘ἀδύνατον’は、運動否定の不合理という帰結が生じるためには、「不可能なもの」と解する必要がある。しかし Witt はここでその語が曖昧に――「能力がない（incapable）」と「不可能である（impossible）」――用いられていると考え、二つ目のほうで「不可能である」という意味に変化しているという解釈を提示している。この解釈は、Witt も自覚しているように、論理的に問題であるが、Witt は、アリストテレスが「能力」と「可能性」との間につながりを見出していたことを示すことによって、自身の解釈の正当化を試みている。Cf. C. Witt, *Ways of Being: Potentiality and Actuality in Aristotle's Metaphysics*, Cornell University Press, Ithaca, 2003, pp.27ff.

（6）第四の反論においてメガラ派の見解が運動否定論として論駁されることは、メガラ派の見解がその論理に従って説明された後で、「その結果、これらの説は運動も生成もないものにする」（Θ3, 1047a14）と言われていることから明らかである。アリストテレスはこの帰結を理解させるために以下のように説明している。「というのは、立っているものは常に立っているだろうし、座っているものは常に座っているだろうからである。というのも彼は、座っているのであれば、立ち上がることはないだろうからである。なぜなら、立ち上がることが可能でないもの［立ち上がる能力を奪われているもの］は、立ち上がることの不可能なものだろうからである」（Θ3, 1047a15-17）、と説明している。

（7）第四の反論は、能力を奪われているものを、時間的な制約がない限りでの不可能なものとみなすことによって成り立っているように思われる。Burnyeat, et al.によれば、アリストテレスは、能力に関する時制つきの言明で始まった議論に、時制なしの不可能性を不当に導入することによって、運動否定という結論を引き出している。Cf. M. F. Burnyeat, et al., *Notes on Books Eta and Theta of Aristotle's Metaphysics*, Study Aids in Philosophy, Oxford, 1984, pp.65-66.

（8）生成することの不可能なものが「ある」と言われる場合の「ある」は、生成することの不可能なものが存在するという意味ではない。生成することの不可能なものは存在すると思われるので、その存在を語ることは誤ったことではない。ここでの「ある」は、生成することの不可能なものがその生成を実現していることを意味しているのであり、訳では、「現に生成、運動している」と補足しておいた。Cf. Burnyeat, et al., 1984, p.66.

（9）アリストテレスはメガラ派の見解の提示に際して、「建築活動しているとき」、「建築活動していないとき」というように、その見解を、時間が考慮されたものとして示していた。第四の反論が反論として強力であるのは、メガラ派がその二つの時点――建築活動している時点と建築活動していない時点――が存在することを認めているにもかかわらず、建築活動しているなら常に建築活動しており、建築活動していないなら常に建築活動していないという結果が生じるからである。Cf. Burnyeat, et al., 1984, p.65, Makin, 2006, pp.68-69. この説明は正しいように思われる。しかし、第四の反論で言われていることをよりよく理解するには、メガラ派の立場により近づいていく必要があると筆者は考える。以下で、メガラ派の立場に近づいてその反論を理解する解釈を示す。

（10）アリストテレスはすぐ後でメガラ派の見解について、「それらの説は能力と活動とを同じものにしている」（Θ3, 1047a19-20）と述べている。

（11）この箇所の「ある」は一見、先の引用（Θ3, 1047a12-14）におけるのと同様に、生成、運動するという意味であるように思われる。確かにこの文だけを見ると、そのように解することも可能であるように見える。しかし、「そして他の諸々のカテゴリーの場合も同様であり」というように、実体カテゴリーについて説明した後に続けられる文があることから判断して、また「ある」という動詞の主語ないし述語として――訳では主語と解した――「或るもの」が見られることから判断して、この箇所の「ある」は実体カテゴリーに関して言われていると解するべきであることがわかる。実体についての同様の説明は、とくに生成する実体

の説明として、Z巻第七章の一節（Z7, 1032a20-21）にも見られる。ただ、Θ巻第三章のこの箇所では、能力と活動との区別の結果として、あることが可能であるがあらぬ、あらぬことが可能であるがある、と説明されているので、実体カテゴリーに関する説明が出てくることは唐突であるように見える。ここでのアリストテレスの関心としては、生成、運動することが可能であるが現に生成、運動していないことを語ればよいように思われる。おそらく、能力と活動との区別における「能力」と「活動」という語の曖昧さ、すなわち、「可能態」と「現実態」ともとれるという曖昧さから、実体カテゴリーに関する説明が出てきたのではないかと考えられる。しかしともかく、この箇所で「他の諸々のカテゴリーの場合」の例として歩く活動が挙げられていることを見ると、ここでのアリストテレスの関心が生成、運動にあるのだとわかるだろう。

（12）Cf. J. Beere, *Doing and Being: An Interpretation of Aristotle's Metaphysics Theta*, Oxford University Press, Oxford, 2009, p.120, n.5.

（13）Ross は、アリストテレスが第四の反論以降、「可能性」ないし「可能態」の概念――Ross は ‘potentiality’ も ‘possibility’ も同様に用いている――を用いていて、「能力」の概念を用いていないことを見て、アリストテレスが二つの概念を混同していると説明している。Cf. W. D. Ross, *Aristotle's Metaphysics: A Revised Text with Introduction and Commentary*, II, Clarendon Press, Oxford, 1924, p.245. しかし筆者はそれを混同とはみなさず、アリストテレスの関心が移行しているのだと解する。Ross に対する批判としては、Beere, 2009, p.94, n.6を参照。

（14）Waterlow は、この箇所と関連する『分析論前書』第一巻第十三章の一節（*An. Pr.* I 13, 32a18-20）が第十四章の一節（*An. Pr.* I 14, 33a24-25）で ‘ὁριστός’ と言われていることについて、「基準（criterion）」という訳を提案している。Cf. S. Waterlow, *Passage and Possibility: A Study of Aristotle's Modal Concepts*, Clarendon Press, Oxford, 1982, p.16, n.2. 『形而上学』Θ巻第三章におけるこの箇所については、例えば Makin, 2006, pp.72ff. は「テスト」、Beere, 2009, pp.119ff. は「基準」としている。本稿では「規定」としているが、定義という意味では用いていない。

（15）この ‘δύναμις’ については、アリストテレスの関心の移行を考慮して、「能力」ではなく「可能性」と訳すことにする。これまでの論述との関係を重視して、「能力」と訳す者もいる。Cf. Makin, 2006, p.4, Beere, 2009, p.119. ただし、Makin, 2006, pp.xxiii-xxiv, 74はこの箇所の ‘δύναμις’ を「能力」と訳すことに問題を感じていないわけではない。また、註（5）で触れたように、

Witt は「能力」と「可能性」とのつながりを考えており、そもそも、ここで行われる規定を「可能なもの」の規定ではなく、「能力をもっている」ものの規定とみなし、それに伴ってこの‘δύναμις’を「能力」と訳している。Cf. Witt, 2003, pp.33-35, 129-130, n.28.

(16) 解釈者たちが指摘するように、『分析論前書』第一巻第十三章の一節（*An. Pr.* I 13, 32a18-20）では許容様相の説明として、ここでの「可能なもの」の規定にさらに、必然ではないことが加えられている。

(17) 座ることが可能なものについて、「座ること［座るという活動］がそのものに属するとした場合に、不可能なことが何もないであろう」と説明され、さらに、動く、動かす、立つ、立たせる、ある、生成する、あらぬ、生成しない、といったことが可能なものも、同様に説明されると言われている。

(18) 足をもっていることと足をもっていないこととは矛盾しており、これらが同時に成り立つことが不可能であることは明白である。歩くことが不可能なものについての、このような説明はアリストテレスが挙げているものではない。アリストテレス自身は、正方形の対角線がその辺によって通約されることが不可能であるといった例を挙げている。「可能なもの」の規定をあてはめて出てくる不可能な帰結がより明確な不可能性を示していることについては、Makin, 2006, pp.74-75を参照。

(19) 「活動の否定が属する」という言い回しは、『命題論』第十二章の一節（*De Int.* 12, 21b12-17）に見られる。その一節でアリストテレスは、同じものがあることもあらぬことも可能であることを説明するにあたって、切られることが可能なもの、歩くことが可能なものは、切られないことが可能なもの、歩かないことが可能なものであると説明している。そして「それ［可能なもの］には［活動の］否定も属するだろう」（21b15）と述べている。

(20) 不可能であることについて言えば、『命題論』第十三章における、可能、不可能、必然などに関する随伴関係の表（*De Int.* 13, 22a24-31）――その表は論述の過程にあり一部誤りを含むが――からわかるように、「あることが不可能である（ἀδύνατον εἶναι）」は「あらぬことが必然である（ἀναγκαῖον μὴ εἶναι）」と言い換えられる。『形而上学』Δ巻第十二章（Δ12, 1019b23-27）でも、正方形の対角線がその辺によって通約されることが不可能である――『命題論』で言われる「あることが不可能である」に対応する――ことについて、通約されないことが必然（ἀνάγκη）であり――「あらぬことが必然である」に対応する――、通約されることは必然的に（ἐξ ἀνάγκης）偽である、と説明されている。

(21) そこでは、動くという述語が与えられないあらぬものとして、思惟されるものと欲求されるものが挙げられ、それらは現実的にはあらぬが、可能的にあるものであり、現実的にあるだろう、と言われている。

(22) Hintikkaは、Lovejoyがアリストテレスのものとしてではなく取り上げた「充満の原理」を、アリストテレスに帰するべきであると考える。その典拠として挙げられるのが、Θ巻第四章のはじめのテクスト（Θ4, 1047b3-9）である。Cf. J. Hintikka, *Time & Necessity: Studies in Aristotle's Theory of Modality*, Clarendon Press, Oxford, 1973, pp.95-109, A. O. Lovejoy, *The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea*, with a new introduction by P. J. Stanlis, Transaction Publishers, New Brunswick, 2009 (originally published in 1936 by Harvard University Press), pp.52-55, 340, n.38（アーサー・O・ラヴジョイ『存在の大いなる連鎖』、内藤健二訳、晶文社、東京、一九七五年、五五―五七頁、三五五―三五六頁、原注（38））. Lovejoyはこの注で、アリストテレスが充満の原理を認めているように見えるΘ巻第四章のはじめの一節に関して、充満の原理をそこに読み込む必要がないことを示している。

(23) Cf. Hintikka, 1973, pp.95-96.

(24) ここで筆者は、「pするだろう」ということの意味を捉えるためにΘ巻第三章における「可能なもの」の規定を思い起こし、アリストテレスが言おうとしているのは可能性の実現の仮定の話であって、実際に実現するだろうということではないのだと解釈した。ちなみに、Hintikka, 1973, p.109はこのような解釈の可能性を否定しようとして、可能性がいつか実現されるだろうという原理と、可能性の実現が仮定されうるという原理との関係について考察している。Θ巻第四章のはじめのテクストについてはさまざまな解釈があるが、これについては、Makin, 2006, pp.83-89を参照。また、アリストテレスは未来の主張に関する現在の時点での真を問題にしているとして充満の原理に反対するBeere, 2009, pp.125ff.の論述も参照。

(25) 先の引用（Θ3, 1047a12-14）を参照。「不可能なものはそれ［「ある」とか「あるだろう」ということがないもの］を意味していた」と言われていた。

(26) これについては、拙稿「現実態としての魂」（立正大学文学部『立正大学文学部研究紀要』第二四号、二〇〇八年、一―二八頁）の四―六頁で論じた。

(27) アリストテレスは『自然学』第一巻第七章において、属性的生成と実体的生成について説明を行っている。実体的生成における

生成の「基体」は曖昧な概念であるが、筆者がここで「存続基体」と呼んでいるのは、生成の基にあってその生成を支える質料のことであり、生成したものの構成要素になるもののことである。

本稿は科学研究費補助金若手研究（B）による研究成果の一部である。

（本学大学院人文科学研究院・准教授）